

大齋節第1主日

2011/3/13

聖マタイによる福音書第4章1～11節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

一昨日(11日)に起きた巨大地震と大津波のため、多くの方々が被災されました。亡くなられた方、行方不明の方、家を流された方、避難生活を余儀なくされている方々が沢山おられます。まだ詳しい状況が分かりませんが、これらの方々を覚えて、今日の礼拝でお祈りしたいと思います。

先週の水曜日から今年の大齋節が始まりました。今日は、その最初の主日です。大齋節第1主日の福音書は、毎年、イエスさまが荒野でもって悪魔の誘惑に打ち勝たれた物語を読むことになっています。かつての文語の祈禱書でも、この主日には、マタイ福音書の誘惑物語が読まれてきましたので、今日のこの物語は、皆さんもよくご存じのことと思います。

さて、イエスさまは洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたのですが、その時、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適うもの」という天からの声を聞きます。イエスさまはこの時、ご自身が「神の子」であるという自覚をもたれ、宣教に向かって進んでいく使命を悟りました。しかし洗礼を受けた後、直ちに宣教活動を開始されたかという、そうではありませんでした。その前に、“霊”に導かれて、荒野でもって悪魔の誘惑と対決されたのです。

新共同訳聖書では、今日のこの箇所の小見出しは、「誘惑を受ける」となっていますが、本田哲郎神父の訳では、「荒野での試みを通して、明らかにされたイエスの活動姿勢」と書かれています。悪魔の誘惑を受けたことの意味は何であったのか。それは、イエスさまが、これから宣教活動を始めるに当たって、どのような姿勢で向かって行くか、そのあり方を根本から問い、確固とした姿勢を打ち立て、決意を固めようとした出来事だ、ということです。

神さまから与えられた道を歩んで行くためには、人間の思いを超えて、どこまでも神さまにのみ信頼し、全てを委ねることがなければ、歩み通すことは出来ません。それが、どのようなことであるかを、もう一度ご自身の中で確かめ、明らかにするために、“霊”の導きによって荒野での誘惑を受けられたのです。

3つの誘惑がなされました。第1の誘惑は、飢えの問題です。人間が生きていく上で食べ物の問題は基本的な事柄です。わたしは1944年生まれですが、わたした

ちの世代を含めて、戦後、生まれた日本の人々は、飢えということを知りません。お腹が空いて食べるものが何もなく、そのために苦しんだという経験がありません。そのことを感謝しています。偶に、食事を摂り損なったことがあったとしても、次には間違いなく食べることが出来るわけですから、お腹が空いたと大袈裟に言って廻ったとしても、命に危険を感じるわけではありません。

しかし、飢えの経験がないことが、世界の中で今、起こっている深刻な問題について共感することを妨げ、理解を示すことが出来ずに、行動に移すことに無関心でいられるのだとしたら、その幸せは、単なる自己本位の幸せに過ぎないと言わなければなりません。

イエスさまは「日ごとの糧を今日もお与え下さい」と祈るよう教えられたのですから、イエスさまの時代には、日々の食事をどのようにして賄うかということは、今よりもずっと深刻な問題だったでしょう。イエスさまは弟子たちに、5千人もの人々に自分たちの手で食事を提供しなさいと仰りましたが(14:16)、それは弟子たちの手には、到底負いきれない課題であったことは、明らかです。

ですから、人々に確実に食料を提供することを保証して、飢えの問題を解決するならば、そのことによって、人々の称賛と支持を得られることは目に見えています。誰もが未だかつて解決できなかったことを、あっさりとやってのけて見せれば、人々がそのような特別の力をもつ人物を、ほうって置くわけではありません。「神の子」として承認し、崇めることは間違いのないことです。また、そのようにすることが人々の期待に応えることです。そう言って悪魔は誘惑したのです。

飢えの問題は、昔のことだと言って終わらせるわけには行きません。今日に於いても、世界各地で深刻な問題とされています。今、飢えに苦しんでいる人々が世界中で何人いるか、ご存じでしょうか。数年前の統計ですが、当時、地球上の60億の人間のうち、実に8億数千万人もの人たちが食べ物が無くて飢えている状態にある、ということでした(『東京青年』416号)。その数が、増えていっているのか、それとも減っているのか、わたしには分かりません。

8億数千万人といっても、実感がないかも知れません。しかし、テレビで見る食料の絶対的に不足している国の深刻な状況には、目を覆いたくなります。まともに目を向けることの出来ないような、ひどい状況にまで進んで行く前に、神さま、何故、何とかして下さらないのかと、叫ばざるを得ないのです。神さまは、何故、飢えで死んでいく人々をそのままにしておかれるのか。

その問いに、わたしたちは、何と答えるのでしょうか。果たして納得のいくような、何らかの説明が出来るのでしょうか。他の人を納得させることが無理だとしても、自分自身は頷くことができるような、信仰の言葉を持つことが出来るでしょうか。神さまの特別の力が発揮されなくても、現実の困難がそのまま続いていても、そこに神さまが働いていて下さると、確信を持って言うことが出来るでしょうか。

第2の誘惑のように、神さまが、本当にわたしたちを愛して下さっているのか、試してみたいくなることも、やむを得ないと思い始めるのではないのでしょうか。

悪魔はイエスさまに、「もしお前が神の子なら」と言って、神さまの愛を試すように誘いました。この悪魔の言葉は、十字架の上で苦しんでいるイエスさまに対して、そこを通りかかった人々が投げかけた言葉でもありました。「神の子なら、自分を救って見ろ。そして十字架から降りてこい」と罵ったのです(27:40)。イエスさまの最後の苦しみの時に、悪魔はまた姿を現して、「お前は神の愛する子だろう。それならば、神の愛をはっきりと誰にも分かるように見せてみろ。十字架から飛び降りて、その苦しみから解放され救われるならば、誰もがお前を神の子と認めるぞ」と言って、イエスさまの進む苦難の道の前に立ちふさがろうとしたのです。

イエスさまは、ご自分の苦しみを特別な力を用いて取り去ることはなさいませんでした。それは、わたしたちが苦しむときに、そこにイエスさまも一緒にいて、苦しみを共にして下さるためです。わたしたちを苦しみの中で、孤立させないためです。わたしたちが孤独の中で、神さまを見失わないためです。

イエスさまの十字架の道の前に立ちふさがったのは、この時の悪魔だけではありません。ペトロもまた同じ行動に出たのでした。イエスさまの一行が、フィリポ・カイザリヤ地方に旅をした、その途上で、「あなたは生けるメシア、神の子です」(16:16)と信仰を告白したペトロは、イエスさまからご自身の苦しみと死、そして復活を打ち明けられ、予告されたときに、イエスさまを脇へ連れて行って、叱ったのです。「とんでもないことです。そんなことが起こるはずはない」と言って非難したのです。

そのペトロに、イエスさまは「サタン、わたしの後ろに失せろ。お前はわたしの躓きだ」(岩波訳)と言って、イエスさまの進んでいこうとする道の前に立ちふさがるのではなくて、後から従ってくることを求められました。十字架の道を妨げようとするものは悪魔だ、と厳しく退けられたのです。この世の栄光栄華を求めて、神さまを礼拝することを忘れ、悪魔に仕えることを、断固として拒否されたのです。

イエスさまがペテロに言った言葉は、「お前は神のことがらを思わず、人間のことがらを思っているのだ」ということでした。

わたしたちも人間のことを思います。自分も人も良い生活を送ることが出来るように願います。幸せであることを望みます。そのような願いや望みは、正しいことだと思えます。決して間違っていない。だから、苦しいことや辛いことがあれば、それを何とか解決しようと思えます。問題を抱えていれば安心を得ることが出来ません。だから、あらゆる知恵を用いて、もつれを解きほどこうとします。

しかし そのようなときに、神さまは、わたしたちが用いる知恵の一つとか、可能性などではありません。或いは、人間のあらゆる知恵を使い尽くして、尚、解決しないときに、最終的に登場する伝家の宝刀のようなものでもありません。そのような神さまを期待するとしたら、わたしたちは神さまに絶望せざるを得ないのです。

イエスさまは、神のことがらを思え、と言っておられるのです。人間のことがらばかりを思って、その延長線上で解決を図ろうとしても、それではダメだと言うのです。イエスさまが、十字架の道を最後まで歩いて行って下さった。そして、十字架にかかって死に至るまで、苦しみを引き受け通して下さった。そこに目を向けなさいというのです。

イエスさまは、何故、その苦しみを避けようとされなかったのでしょうか。ゲッセマネの園で、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(26:39)と祈っておられます。人間のことがらを思えば、苦しみを過ぎ去らせて欲しいというのが、本音です。そして、神さまは、そのようになさろうと思えば、お出来になるのです。でも、それをお求めにはなりません。人間のことがらよりも、神のことがらが成ることを願っておられるのです。その結果、イエスさまは闇の支配に覆われて、光りが全く消え失せてしまうような状況の中に置かれました。しかし、そのような中であって、尚かつ、神さまは光りを輝かすことがお出来になると信じておられるのです。そこに命への道があり、神さまの愛が現されることを、揺るぐことなく信じておられるのです。だから、神さまにのみ仕えることがお出来になるのです。

これは、神さまに対する絶対的な信頼です。神さまのなさり方に対する確信です。誘惑物語は、イエスさまの信仰がどのようなものであったかを、わたしたちに明らかにしてくれています。ご自身が人から何者かと問われ、自らも問わざるを得ないような状況にあっても、「あなたはわたしの愛する子」という神さまのみ声を信じ

ったのです。「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という御言葉をご自分の生き方に於いてお示しになったのです。

悪魔の誘惑は、神さまと人間の間を裂こうとします。そして、わたしたちは、しばしば、その悪魔の試みに敗れ、神さまに対する信頼を失うのです。その時に、わたしたちは、イエスさまの十字架の苦しみの姿に目を向けて、とことん神さまを信頼されたイエスさまの信仰を思い起こしたいと思います。そして、わたしたちも、イエスさまの信仰に包まれて、神さまの真実に触れ、希望を見出すことが出来るように、今日はお祈りいたしましょう。